



みんなが分かる楽しい授業（小学校）

～障害の理解から具体的な支援へ～

小学校中学年になり、思うように学校生活が送れず、自信を失いがちだったアキオさん。そんなアキオさんに対して担任のタカハシ先生は、アキオさんのために考えた支援の工夫を、授業で繰り返し行いました。タカハシ先生は授業を展開しているうちに、アキオさんのために工夫したことが、実は学級全体にとってもよいことだったということに気づきました。

●アキオさんへの支援がみんなの支援に



カヤマ先生（SREC），アキオさんの様子を見に来てください

新しく学級担任になったタカハシ先生は、アキオさんが授業に集中できないことが多く、教室を出て行ってしまったり、学級の友だちとトラブルになったりするので、大変心配していました。何とかしたいと思い、まずSRECのカヤマ先生に相談しました。

SRECのカヤマ先生は、教室で行動の観察をしたり、低学年の頃の様子を担当だった先生に聞いたり、保護者と懇談をしたりしました。保護者との懇談から、実は保護者も以前から子育てに悩んでいたということが分かりました。

実は…私たちが心配していたんです。



SRECとの懇談を受けて、保護者はアキオさんと病院を受診しました。そして、医師からも今後の対応についてアドバイスを受けました。

SRECのカヤマ先生は自律学校教育相談に依頼して、一緒にアキオさんの理解に努めるとともに、校内研修会を開催しました。タカハシ先生は、自律教育担当教育支援主事から授業づくりにおけるポイントについて細かく教えていただき、授業づくりに努めました。

支援は授業で勝負！

1. タカハシ先生は、学級会や道徳の時間に、アキオさんの行動の特性について話をするとともに、誰にも得意なこと、苦手なことがあること、「みんなちがっていいんだよ」ということについて、繰り返し話しました。また、タカハシ先生がアキオさんに接するときの姿勢や方法が学級の子どもたちがアキオさんに接する際のモデルとなったようです。
2. これまで話して説明することが多かったタカハシ先生は、視覚的に分かるように提示することを心がけました。プレゼンテーションをしたり、実際にやって見せたりしました。学級生活では、グループ分けに配慮したり、学級の保護者や教師が自然な形で学級の活動の支援に入ったりするようになりました。

このような授業を繰り返すことで、アキオさんは徐々に授業に参加できるようになっていきました。そして、タカハシ先生は、何よりもアキオさんのためにと工夫した支援が、実は個別支援が必要な他の子どもたちにとっても有効な支援であることに気づいたのです。

●体育の授業におけるアオキオさんへの支援の工夫

- 1 単元名 「キックベースボールゲーム」
- 2 主眼 キックベースボールを始めたばかりの子どもたちが、学習カードを見たり、先生からの説明（学級全体）を聞いたりしながら、ゲームのルールや進め方を理解して、試合を楽しむことができる。
- 3 展開

展開	学習活動	アキオさんへの支援	実際のアキオさんの様子	支援の視点
はじめ	1 準備運動をする。	・ランニングを一緒にやったり、チームのメンバーと同じようにやるように声をかけたりする。（モデリング）	・教師の声がけにより、チームの行動に遅れることなく準備運動に参加できた。	タカハシ先生が大切にしたこと 体験を重視した学習内容の獲得のために ①目標の確認 ↓ ②モデリング ↓ ③リハーサル ↓ ④フィードバック ↓ ⑤定着化 この①から⑤のサイクルの繰り返しにより、実際のスキルを身に付け自信がつくとともに、学習の楽しさも味わえると考えました。
	2 ルールの確認をする。	・打った後はコーンを指して走ること、コーンを回ってホームベースに戻ってくることを具体的に示して確認する。（目標の確認、モデリング） ・とったボールをアウトフィールドに持っていくこと、投げても走ってもいいこと、アウトと叫ぶことを確認する。（目標の確認、リハーサル）	・教師の動きを見ることにより、打った後、どうすればよいか分かり、次の活動を予測して動くことができた。 ・アウトの仕方が分かり、実際にアウトフィールドにボールを運ぶことができた。	
なか	3 試合を行う。	・打ったときはコーンを指して走るように声をかける。 ・強いボールが来ない位置を守るように配慮する。 ・好プレーができたときは褒め、自信がもてるようにする。（フィードバック・定着）	・友だちの声がけにより、ボールを蹴ることができ、コーンを目指し走ることができた。 ・表情もよく楽しく活動していた。	
おわり	4 まとめをする。	・具体的なプレーの姿を示して賞賛するようにする。（フィードバック） ・全力プレーしたことを褒め、その上でどうすればうまくできるか、助言する。	・自分のプレーを振り返ることができ、楽しく参加できたことで、次時への目標をもつことができた。	

事例から学ぶ

担任が周りに相談できたのは、校内で研修会が開催され、その必要性が共通理解できていたからでしょう。また、本事例のように、授業を充実させることが有効な子どもの支援になります。これは特定の子どもへの支援のためだけに行われるのではなく、実は学級全体の支援になっているのです。

最初は、一人のために特別なことをやっているんじゃないかと気が重くなったのですが、やってみると、みんなの学ぶ環境を整えることになると分かり、気が楽になりました。



タカハシ先生

少人数で取り組む算数の授業(小学校)

～自律教育のノウハウを生かして～

算数の少人数学習については、習熟度別になっている学校が多いかと思います。本校でも、習熟度別にコースを設けています。基礎的な内容を扱う「基礎丁寧コース」には、LDやADHD等の診断を受けているお子さんや、診断は受けていないが支援が必要なお子さんがたくさん学習しています。

本校では、今まで自律教育で培われてきた支援方法を取り入れて、支援の必要なお子さんが「分かる喜び」を味わえるよう、学習指導に取り組みました。

●TT(ティームティーチング)を組むために、時間割を工夫しました

支援が必要なお子さんの学習指導はTTが有効だと考えていますが、TTを組むのはむずかしい現状にあります。それでも、何とかTTが組めるようにならないかということで、新年度準備の折に、人と時間が生み出せるよう時間割を考えてみることにしました。

今年は情緒障害自律学級に在籍しているヨシオさんが算数を「基礎丁寧コース」で受けるようになっていましたので、情緒障害自律学級担任のオノ先生がサブティーチャーとして支援に入るように考えました。そのために、ヨシオさん以外の子どもたちが原学級で学習する時間をまとめ、その時間に「基礎丁寧コース」の支援に入れるよう、時間割を調整しました。

●まず、子ども理解から始めました

オノ先生は、コースにいる子どもたちがどのような所で支援が必要なのか、よく観察しました。

ユキオさんは、服薬しているけど、どうしても学習に取り組めない日があるよね。

サトルさんはいい意見も出せるときもあるけれど、忘れ物が多くて学習になかなか取りかかれないね。

ケイさんとサヤさんは一生懸命取り組んでいるけれど、九九がまだ十分定着していないみたいね。



カズヤさんは、板書を写すのが苦手で、なかなか取りかかれないね。

シズカさんは自信がないみたいで、不安が強く、なかなか次の問題に進めないね。

ダイキさんとヒロさんは、理解は早いけれど問題を解き終わると席を離れてしまったり、二人でおしゃべりを始めてしまったりして、次の活動に移れないね。

●日常的に、情報交換を行いました

情報交換は授業終了後、担当二人で黒板を消したり机を整えたりしながら、短時間で行います。その日の授業で気付いたことはその場で話して共有化し、記録しておくようにします。また、実施したテストや学習カードの内容も丁寧に分析して、つまづきを確認しました。

●子どもに応じた支援を取り入れました

フラッシュカードの活用

フラッシュカードに問題を書き、授業開始時にテンポ良く提示して見せました。子どもはカードに集中し、その後の授業への取り組みも良かったように思います。

フラッシュカードはテンポ良くめくることができるように、滑りの良い厚紙で作ったりラミネートしたりしました。

単元に入る前に既習事項を確認！

ドリルの時間等を利用して、次の単元の学習に必要な既習事項について、理解の状況をチェックしました。理解が不十分な場合は、フラッシュカードで使用して確認をしてから、単元に入るようにしました。

単元後も繰り返し復習！

理解するのがゆっくりな子どもたちなので、授業の中だけではなかなか定着できません。繰り返し復習していくことで、理解が深まります。単元終了後も、フラッシュカードで繰り返し復習することで、定着を図ることができます。

ミニプリントの利用

課題がすべて終わってしまった子どもには、丸付けをしながら別の課題を1問ずつ印刷したプリントを渡し、時間のすきまができるようにします。1問だと抵抗も少なく、子どもも喜んで取り組みました。切り替えが苦手な子どもも、これならスムーズに切り替えができます。

丸付け

教師が机間指導しながら、その場その場で素早く丸を付けていきました。丸をもらうとどの子どもも喜び、自信を持って次の課題に取り組みました。また、理解が不十分な子どもは回答しているときにかかわることで、つまずきが発見でき、必要な支援をすることができました。

手順の言語化

特別な教育的支援が必要な子どもたちの中には、図形の見方や理解が苦手な子がいます。学級担任と連絡を取り合い、単元に入る前に「図形の見方・書き方」の手順を言語化して支援するのも有効です。

座席の工夫

学級の座席と違って生活班を考慮しなくても座席を組むこともできるので、学習のしやすさを優先して座席を組みました。

- ・板書を写すのが苦手な子は前へ
- ・互いに刺激になりやすい子は離して
- ・自信のない子のそばにはモデルになる子を

忘れ物対策

算数の授業に必要な物は、教科書ノート等**全部かごに入れて**教室に置くようにし、かごに筆箱だけ追加して教室移動すればよいようにしました。

事例から学ぶ

情緒障害自律学級担任がTTの一人として学習指導に入り、自律教育のノウハウを生かして支援していくことは、特別な教育的支援が必要なお子さんだけでなく、すべてのお子さんの学習支援にも有効です。集中を高める方法として、他にも興味関心を引く教材・教具を準備する、時間を計ってゲーム感覚で行う、使わないものは必ず片付けておく等がありますが、これらのことは、実は自律教育のみでなく、すべての授業においてポイントとして配慮していなければいけないことだと思います。

事例 13

みどころ



通常の学級で担任が取り組む支援のあり方(小学校)

～日常的に取り組める支援の実際～

特別な教育的支援が必要な子どもたちが、通常の学級に何人も在籍するといったケースが増えてきました。通常の学級の担任からは、支援したいという気持ちをもっていても、「どうしてよいのか分からない」「なかなか忙しくて勉強している時間がない」といった声を聞きます。そのため、なかなか具体的な支援に結びついていない現状があります。

これは、ちょっとした支援のポイントを大事にして日常の中で取り組んだ事例です。

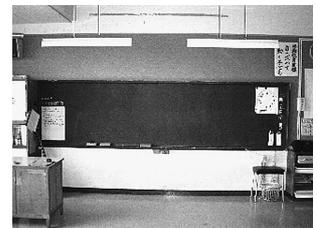
●通常の学級の中でできる支援

○担任

- ・ 思いを伝えたいときのブロックサインを決める。
- ・ 「がんばりカード」を作る。
- ・ 用件は端的な言葉で伝える。
- ・ その場その場で、タカシさんの気持ちを代弁する。
- ・ 教科書・プリントは拡大して表示する。
- ・ 「個別の指導計画」を作成する。

○教室環境

- ・ 集中しやすい教室環境にする。
- ・ タカシさんの座席は、前から1列目か2列目にする。
- ・ 黒板の周りの掲示をできる限り取り除き、シンプルにする。



○タカシさん

- ・ 絶対に友だちに悪口を言ったり、暴力をふるったりしないことを約束する。
- ・ がんばったことを「がんばりカード」に記入する。

○タカシさんの保護者

- ・ タカシさんの学校での様子を伝える。
- ・ 学校と家庭の連携の仕方について共通理解をする。
- ・ 「がんばりカード」に記入する。

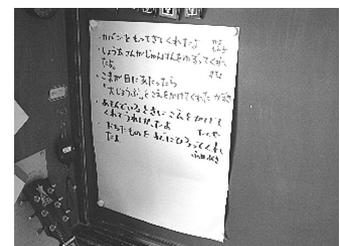
○学級懇談会

- ・ タカシさんの保護者に許可をいただき、タカシさんのことを話題にする。
- ・ タカシさんがトラブルを起こした時の対応の仕方について共通理解をする。



○友だち

- ・ タカシさんとトラブルが起きた時の対応の仕方について考える。
- ・ タカシさんの得意なことや苦手なことを知り、タカシさんの支えとなれるようにする。
- ・ タカシさんのいいところを見つけたら、黒板に掲示してある紙に書く。



たくさん書かれたいいところ

とにかく、担任は一人で抱え込まないように、同僚や専門家にどんどんと相談しました。

●学級集団を育てる

いろいろな子どもを受け入れられる許容量が学級集団になれば、問題を起こしがちなタカシさんをクラスの中で支えることはできません。そこで、「対人関係ゲームプログラム※」を学級で行ったり、お互いの良さを見つけ出す活動を取り入れたりすることを通して、一人一人の違いや良さに気付いたり、お互いが譲り合うことの大切さを知ったりする活動を積み重ねてきました。

●タカシさんの「いいところ探し」

タカシさんは人なつこく優しい面があるものの、友だちに悪口を言ったり、暴力をふるってしまったりすることから、友だちからの印象が悪くなりがちです。そこで、教室の黒板の傍らに、タカシさんの好きな色の画用紙をはり、「タカシさんの『良い心』を応援しよう。いいところを見つけたらここに書いて下さい」とクラスの子どもたちに話をしました。

タカシさんが、何かトラブルを起こしてしまった時など、この画用紙を見せながら「君には、こんなにたくさんの『良い心』とそれを探してくれる友だちがいるじゃないか」と話しました。どんな話をするよりも、この画用紙を見せることが、タカシさんの心に言葉が届くようでした。

コラム：「二つの心」

どんな人の心にも「良い心」と「悪い心」があると子どもたちに話しています。例えば、悪口を言った子がいたとすると「○○ちゃんは『悪い心』が勝っちゃったんだね」「みんなで『良い心』を応援しよう」と声をかけます。そうすることで、その子の存在を責めずに、その子の心のあり方に目を向けてくれました。

●担任が配慮したこと

- ・タカシさんが叩いたり悪口を言ったりする行為をうれしいと思う子ども（保護者）はいません。何より本人も傷つきます。こうした行為についてはないがしろにせず、きちんと対応してきました。
- ・タカシさんの気持ちが友だちに伝わりにくい時は、その場その場で気持ちを代弁しました。
- ・できる限り人前で注意することは避けるようにしました。あらかじめタカシさんとブロックサインを決めておき、2人の間だけで分かるようさりげなく伝えました。
- ・タカシさんが、うまくできないことをタカシさんにだけ求めるのではなく、「クラスみんなの支えが必要なんだ」と話し、友だちからの配慮も必要でだということを、子どもたちに伝えてきました。

●「がんばりカード」

家庭で心がけてほしいことや、その月の課題となる内容を3つ選び、担任の方で「がんばりカード」に記入しておきます。保護者はがんばったことを中心に評価を記入します。それについて、担任もコメントを書いて返すようにしました。

日付	1/2	1/3	1/4	1/5	1/6	1/7	1/8	1/9	1/10	1/11	1/12
目標/努力	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
達成	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
がんばりポイント	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
がんばりポイント	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
コメント											

「がんばりカード」

事例から学ぶ

特別な教育的支援を必要とする子どもたちを通常の学級の中で支援するためには、その子の「セルフエスティーム（自尊感情）」をいかにして高めるか、そのための子ども同士の関係作りをどのように構築していくかが重要です。友だちを前向きにとらえようとする低学年からの取り組みが特に大切です。

※「対人関係ゲームプログラム」…学級集団の人間関係づくりのための技法。対人関係ゲームで体験した他者とのふれあいがきっかけとなって、日常の学級生活場面で行動が変化することが確かめられている。

【参考文献】「対人関係ゲームによる仲間づくり」田上不二夫編著：金子書房



ポイントカードとマニュアルによる分かる状況づくり(小学校)

～社会的ルールを「見えるもの」「関心のもてるもの」に～

高機能自閉症、アスペルガー症候群等、人とのかわりが難しいタイプの子どもの場合、社会的ルールを自然に身につけることができにくいので、自分の興味のままに行動してしまったり、周囲との間でトラブルを起こしてしまったりしがちです。

タロウさんには、ポイントカードを利用し「やるべきこと」でポイントを稼ぎ、稼いだポイントを使って「やりたいこと」をするというシステムを、学校・家庭の生活に導入してみました。また、生活・行動上の課題について、その場面ではどのような行動をとることがよいのか、マニュアル（指針となる文書）を作りました。こうして、「分かる状況づくり」（情報環境の整備）が進むにつれて、学校でも家庭でもより意欲的に安定した生活が送れるようになりました。

●ポイント制の導入

タロウさんは、パソコンを使うことが得意です。そこで、漢字の学習などにパソコンを用いていましたが、学習が終わった後で、インターネット上のゲームサイトにアクセスして遊ぶことが楽しみになりました。ところが、好きな活動だけにはまってしまいやすく、パソコンでのゲームの時間がついつい延びてしまいがちでした。そこで、活動にめりはりを付け、学習・仕事と遊びとのバランスを取るために、SRECからの提案でポイント制が導入されることになりました。

これは、学習・仕事で稼いだポイントに応じて、パソコンの時間が許可されるというものです。本人との協議の結果、ポイントの単位には、「分」を用いることになりました。一つの学習・仕事は、その分量に応じて5分または10分と評価されます。例えば、計算ドリルの1ページは5分、漢字学習ソフトの1問（10題）は10分といった具合です。そこで稼いだ時間（分）だけ、パソコンを自由に使えるのです。

初めは、1校時の前半で稼いだ分を後半で使うという形でした。しかし、パソコンの時間がついつい延びてしまい、稼いだ分を超えてしまうことが出てきたため、その超過分はマイナス（借金）として翌日に繰り越すことにしました。

●プラス・マイナス累計のポイントカード型評価へ

このように、実情に応じて改良を加えるうちに、ポイントの扱いは、その場限りのものから、しだいに累積的なものになっていきました。当初、翌日に繰り越すのはマイナス（借金）だけでしたが、これについては、本人から不満が出されました。つまり、マイナスだけでなく、プラス（貯金）も翌日に繰り越してほしいというのです。言われてみればもっともな意見で、その方が社会のルールにも合っています。また、その場限りでない継続性のある生活づくりを進めていくためにも、その方がよいと思われました。

そこで、ポイントのプラスもマイナスも翌日以後に繰り越すことにし、本人の判断で貯めたり使ったりできるようにしました。まさに、小売店や企業が顧客に対して発行する「ポイントカード」のようなシステムです。右図のような予定表の右側に、ポイント欄を設けて、そこに、ポイントの増減の記録と累計を記入していきます。

いろいろな場合にに応じたポイント数については、本人と協議の上あらかじめ決定し、ポイント換算表（資料1）にまとめました。原則として、この表を基準にポイントの加減を行います。換算表にない事柄については、その都度事前に協議して決めることにしました。

今日の予定					ポイント(分)	
時間	場所	内容	担当	サイン	増減の記録	累計
朝	自律学級	朝の会	学担			
	体育館・校庭	全校活動	SREC			
1校時	保健室	お話	養護			
	体育館・校庭	遊び	自担			
2校時	自律学級	算数	自担			
2休み						
3校時	自律学級	国語	自担			
4校時	職員室	お手伝い	教頭			
給食	〇年〇組	当番・食べる	学担			
昼休み						
清掃	職員室前廊下	ぞうきんがけ	SREC			
5校時	教育相談室	つくる活動	学生			
6校時	教育相談室	つくる活動	学生			
帰り	自律学級	帰りの会	学担			
<下校後の生活>						
時刻	内容		サイン	増減の記録	累計	

ポイントカード型の予定表

●学校—家庭連携のポイントカードに発展

このような学校での取り組みに呼応して、家庭でもポイント制が取り入れられました。例えば、小さな手伝い一つで〇一つ、ちょっとまとまった手伝い一つで〇二つ。そして、〇一つ当たり、ゲームかテレビの5分、または小遣い20円と交換できるというものです。

学校と家庭が同一歩調で歩み出したので、S R E Cが、学校と家庭の垣根を取り払い、学校で稼いだポイントを家庭で使うことができるようにすることを提案したところ、タロウさんは大いに乗り気でした。そこで、保護者と協議した上で、1分＝4円というレートを決めました。これは、学校での軽微な仕事と家庭でのちょっとした手伝いが、ともにゲーム5分に相当し、また、家庭では、ゲーム5分と小遣い20円が等価だったことから算定しました。

このレートに基づいて、学校・家庭共通のポイントカードがスタートしました。前掲の予定表で、いちばん下に「下校後の生活」とあるのは、家庭での記入欄です。この改定によって、サイン帳は学校と家庭の間を行き来することになりました。それによって、タロウさんは、学校で稼いだポイントを、家庭で小遣いに替えたり、家庭で稼いだポイントを、学校でパソコンの時間に使ったりできるようになりました。更に、このような学校—家庭連携のポイントカードになったことによって、学校—家庭間の連絡がより密になりました。

●ポイントカードの効用—コミュニケーション・ツールとして

例えば、タロウさんは、学校の廊下を歩くときに、いつも手製の「剣」（竹ざお、ボール紙の芯などに手を加えた棒）を持ち歩いていました。それに対して、「何やってるんだか」と冷ややかに見る子どもや、よけたり怖がったりする子どももいました。本人のためにも、周りの子どもたちのためにも、この行動はやめさせた方がいいと思われました。

そこで、ある教師が、「棒を持って廊下を歩くのはやめなさい」と強く迫り、棒を取り上げようとしたのですが、タロウさんは満身の力を込めてそれに抵抗しました。結局、悪戦苦闘の末に棒を取り上げたものの、次の日にはまた別の棒を持って歩いている始末でした。

ある日、別の教師が、棒を持って歩いているタロウさんと行き会ったときのやり取りです。

「この学校で、棒を持って廊下を歩いている人、君以外にいる？」

「いない。ぼくだけ」

「そうか。じゃあ、特別許可が必要だね。1回50ポイントということで、どう？」

「ええ！そんなに高いの？そりゃ大変だ！すぐ置いてくる」

そう言って、自分の教室に急いで棒を置きに行った次第です。

●ポイントカードを補完する生活・行動のマニュアル

その後、タロウさんは、保健室の物品を無断で持ち出し、自分の黒いカバンに入れて持ち歩くという事件を起こしました。すぐに謝って返したものの、その後も、自分の持ち物からお気に入りの品を、黒いカバンに入れて持ち歩くことが続きました。学校の行き帰りだけでなく、常にひしと抱きかかえて歩いており、前には無断で持ち出した物品を入れていたこともあっただけに、その黒いカバンは、特に職員からは不審の目で見られることになりました。

そこで、個別指導の時間に、黒いカバンをぶら下げて歩いていると、先生や友だちから「何かよからぬ物を持ち歩いているのでは」と怪しまれることを伝え、より受け入れられやすい行動としては、中が見える小さな手提げ袋に自分の持ち歩きたい物だけを入れて歩くことよいことを話しました。話し合ってから確認したことをその場で文書にしたところ、それを受け入れ、その後は手提げ袋が定着しました。

このように、生活・行動上の課題について、担当教師と話し合いながら作成する指針の文書は、生活・行動のマニュアルとすることができます（資料2）。その中には、どのような行動を取ることがよいのか、そうすると周りの人がどのように感じ、本人にどのようなメリットがあるのか、本人の生活上の関心事と関連付けて書かれています。

事例から学ぶ

発達障害のあるお子さんへの支援では、脳の働きという特性を考慮し、想定される心の障壁を取り除こうとする「心的バリアフリー」のアプローチが不可欠です。心の障壁には、感情面のあつれきだけでなく、認識面の「分らなさ」もあります。

「分かる状況づくり」（情報環境の整備）としては、ポイントカードや生活・行動のマニュアルなど、社会的ルールが見える形にして提示し、本人の生活上の関心事と関連付ける手法が有効です。



ポイント換算表

200X年X月版

【ポイント増】+ (プラス)

学習・仕事	1件	+	10分	ドリル +5分 +3分
	ボーナス	+	5分	
○年○組の授業に参加	参加した時間(分)			
全校活動に参加	列に入って参加		参加した時間×5(分)	
〃	会場内で参加		参加した時間(分)	
〃	会場隣で見学		(最低限ノルマ)	± 0分
★家庭学習(ドリル)	1ページ	+	5分	
★お手伝い(小)洗濯物取り込みだけ等		+	5分	
★お手伝い(大)ごみ捨て,洗濯物たたみ(仕舞うまで)等		+	10分	

【ポイント減】- (マイナス)

<ポイントと交換するもの>

コンピュータ,ゲーム	やった時間(分)		
布粘着テープ(ガムテープ)	1巻	-	125分
セロテープ・両面テープ	1巻	-	50分
棒の携帯	1回	-	50分
模造紙	1枚	-	15分
画用紙	1枚	-	10分
プリンタ用紙	1枚	-	1分
★お小遣い	4円	-	1分

学校だけでなく,家庭でのポイント換算基準(★)も載っています。

※ 当面のレートは,1分=4円とする。

★レジャー(釣りなど) 交通費・入場料(円)または所要時間(分)

※ レジャーをいくらに査定するかは,お母さんと話し合っ

<ポイントで貸すもの>

自律学級教室家賃	1週	-	125分
※ 学期末など,半端の週は,25分×日数で払う。 ※ もし家賃が払えない場合は,○年○組で過ごす。			
使うと減る材料の類(のり・テープなど)	1日	-	10分
	返したら		5分バック
使っても減らない道具の類(はさみなど)	1日	-	10分
	返したら		10分バック

<ペナルティー>

サイン欄のサインなし(空欄)	1回	-	5分
無断使用物品,学習不用物品	1品	-	10分
PC不正使用,無断入室,廊下徘徊	1件	-	150分
予定外行動	捜した時間×人数(分)		

200X年X月X日

これでよしになったら,本人が認め

サイン

資料
2ふしんしゃ
不審者

「不審者」とは、何をやるか分からない、怪しい人のことです。悪いことをするかもしれないと、思われている人です。

例えば、黒いカバンをぶら下げて歩いていると、何か見られたくない物を隠し持っていると思われ、怪しいやつ、つまり不審者と見られてしまいます。



不審者にならないためには、黒いカバンをぶら下げて歩くのではなく、口の開いた小さい手さげぶくろに、自分の小物だけ入れていきましょう。



そうすれば、「入れているのは自分の小物だけです。不審な物は持っていませんよ」と言っているようなものですから、先生に呼び止められて、「中を見せなさい」と言われることもありません。



黒いカバンをぶら下げて歩くなど、「不審な」行動をとったときには、廊下徘徊、PC不正使用と同じ150 (分) となります。

▶自分が他の人からどのように見られているか、または見られそうなのか、インパクトのあるタイトルを工夫して記述しました。

▶Aではなく、Bというように、とってはいけない行動だけでなく、とるべき行動を明記しました。

▶不適切な行動 (A) をとるとどのようなデメリットがあり、適切な行動 (B) をとるとどのようなメリットがあるのか、ポイントにも触れて書きました。

集団行動

「集団行動」とは、たくさんの人の中に入り、並んで話を聞いたり、いっしょに活動したりすることです。

全校体育、全校音楽、運動会などの活動は、集団行動です。将来、大学に入ると、大勢の人が集まる場面がたくさんあります。そのために、これらの活動に参加して、今から集団行動に慣れておくことは、とても役に立ちます。

〈大学のキャンパスライフ〉

※大勢の人が集まる場面がたくさんあります。



授業 (〇〇大学〇〇学部)



授業 (〇〇大学)



入学式 (〇〇大学)



学生食堂 (〇〇大学)



学生食堂 (〇〇大学)



入学式 (〇〇大学)

- ▶列に入って参加すると 参加時間 (分) × 2.0
- ▶列の後に参加すると 参加時間 (分) × 1.0
- ▶列の外で参加すると 参加時間 (分) × 1

列に入って10分以上いたら、たこ焼き。

▶課題となっている行動に、適当と思われる名前を付けてタイトルとし、冒頭で定義しました。

▶タロウさんの場合、将来、大学に行きたいという希望を述べています。また、当面、たこ焼きを作りたいという願いをもっています。そのような本人の関心事を、集団行動の練習を積み重ねる意義、それを成し遂げたときのご褒美として、関連付けて記述しました。

事例
15

自律学級での支援を通常の学級での指導につなげる(小学校)

～「連絡ノート」で支援方法を共有～

自律学級に在籍する5年生のカズオさんは、好きなビデオは大きな音でも平気ですが、耳慣れない音楽は耳をふさいで嫌がります。音楽の練習や音楽会への参加が大きな課題でした。新しく原学級担任になったタナカ先生もカズオさんの行動を理解しようと一生懸命でしたが、自律学級担任のハヤシ先生との連絡・相談の時間はなかなかとれず、毎日が試行錯誤の連続でした。そこで、互いに時間の取れるときに気軽に連絡し合えるようにと、「連絡ノート」を用意して連携した事例です。

図工でカッターを使うんだけど、カズオさん、だいじょうぶかしら。

給食当番もやってほしいけど、みんなと一緒には無理かしら？

朝の歌が始まると自律学級に帰っちゃうけど、歌が嫌いなのかなあ。

音楽会ではカズオさんにも一緒にステージに立ってほしいけど、どうやったらいいの？

タナカ先生

ハヤシ先生

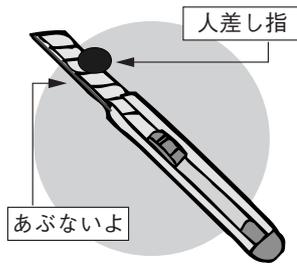
原学級での学習内容や課題、タナカ先生が困っていることが具体的に分かれば、ヒントぐらいは出せるんだけど。今日も放課後は出張で、ゆっくり話をする時間がとれないなあ。

何かいい方法はないかな？

「連絡ノート」を用意し、時間のあるときに記入して、連絡を取り合うことにしました。

() 月 () 日 ()

教科・単元名	<児童の様子> 次回はカッターを使って工作用紙を切ったり、模様を切り抜いたりする予定です。下絵は友だちと一緒に大好きな電車を描き、ご機嫌でした。
図工	▶カッターは、一人で使わせても大丈夫でしょうか？
<自律学級担任から> *時間いっぱいクラスで楽しく学習できたようで、ピョンピョン跳ねながら帰ってきました。カッターはどこにどの指を置いて握ればいいのか、刃の部分は危ないことが視覚的に分かるように、シールをはったり色をつけたりして示すと、理解しやすいかもしれません。こちらでも扱えそうなら事前にやってみます。	



ポイント1

◆「原学級での様子が分からないので教えてください」と自律学級担任から問いかけるところから始めました。

ポイント2

◆始めから毎日書こうとすると、息切れしてしまうので、「書けるときに書こう」という気軽な気持ちでやりました。これが長続きするコツだと思いました。

ポイント3

◆1枚プリントでやり取りするのもよいのですが、ノート形式にすれば、指導の経過や支援の方法が形に残るので、保護者と懇談をする際の貴重な資料となりました。



「連絡ノート」を活用したカズオさんへの支援の実際を紹介します。

音楽会に向けての支援

支援 1

◆カズオさんが友だちと一緒にスタートラインに立てるように、活動の意味を伝える支援をしました。

タナカ先生→ハヤシ先生

朝の会でも、合唱曲の練習をしているけれど、一緒に歌ってくれません。
この曲が嫌いなのかしら？

「連絡ノート」

ハヤシ先生→タナカ先生

なぜ毎日練習するのか（意味）が理解できていないのかもしれませんが、音楽会で歌う曲であることを、説明しておきます。



タナカ先生→ハヤシ先生

全校での合唱曲とクラスの発表曲を、カセットテープに吹き込んで持たせますね。



カズオさん

タナカ先生が作ってくれたカセットテープを、お母さんと出かけるときも車の中で聞いていたカズオさんは、すぐに覚えることができました。家でも自分から口ずさむなど、楽しむ姿が見られるようになり、学級や音楽の時間にも、一緒に参加できるようになりました。楽器の練習にも意欲的に取り組めるようになりました。



音階ごとに色を変える

支援 2

◆楽譜にも鍵盤ハーモニカにも、音階ごとにシールの色を変えてはり、視覚的に分かるようにしました。指番号を併用すると分かりやすそうだと母親から連絡があり、相談しました。

支援 3

◆「①歌 2回、②合奏 2回、③〇時〇分になったら終わりです」と、カズオさんに予定をあらかじめ伝えておくことで、ステージ練習に最後まで参加できるようになりました。

事例から学ぶ

自律学級に在籍する児童が通常の学級で共に学習するときには、自律学級での支援方法をどのようにして通常の学級の支援に生かしていくことができるか、伝えていくことができるかがポイントです。

また、その効果的な支援方法を原学級担任だけでなく専科、クラブ・児童会担当の先生方等保護者も含め、その子にかかわるすべての人たちと共有できると、本人の安心と自信につながり、生活がより豊かなものになりそうです。

事例
16

みどころ

「親子の会」で元気いっぱい(小学校)

～語り合える場・分かり合える仲間と、子どもたちの集団保障を～

様々な困難を抱えている子どもの保護者は、「我が子の姿をどう受け止めればいいのか」「我が子にどのようにかかわっていけばいいのか」「誰にも分かってもらえないのではないか」といった悩みを一人で抱え込みがちです。子どもも地域の子どもの集団にうまくなじめない場合が多く、そのために放課後や休日の生活の場が限られがちです。そんな親子が集まって、色々なことにチャレンジし始めました。お母さんたちは自分の思いを語る場を見つけ、子どもたちはボランティアのお兄さんやお姉さんと様々な活動をして楽しむ場となりました。

そんな「親子の会」には、毎回様々な親子が元気をもらいに来ています。



近くの学校で「発達障害」をテーマにミニ講演会が開かれました。すべての保護者に紹介するとともに、SRECがナカジマさんやカサイさんを講演会に誘いました。カサイさんは都合をつけて聞きに行きました。会場で同じ学校のお母さんたちを見つけ、ホッとした顔になったカサイさん。

講演会が終わったその場で、井戸端会議が始まりました。そのうちに、カサイさんの目から涙がこぼれてきました。

「『悩んでいるのは自分一人じゃない』とホッとしました。あのお母さんたちともっと話をしたい」

- ・放課後や休日の子どもの遊び場がほしいんです。
- ・地域のサークルにもなかなかなじめない子どもたちの遊びの場を作りたい。
- ・集団遊びができるようにしてあげたい。

作ってしまおう！「親子の会」



あの人も、誘ってみましょう。

子どもたちグループは学生さんや先生と集団遊び！ 親グループは話し合いと学習会！



ナカジマさんにも声をかけてもらえないかしら。



「親子の会」結成

月に一回・土曜日の午後・会場は学校

信頼し合える関係づくり

～みんなが先生 みんながリーダー～



- ・「みんなで解決していく気持ち」を大事にしました。
- ・「同じ悩みをもった仲間である」という気持ちを大事にしました。だから何でも話せます。
- ・運営は保護者が中心になって進めました。

- ・相談室と体育館をキープしましょう。調理室も良いですね。
- ・何かあったらいつでも職員室にどうぞ。
- ・学校施設の借し出しや連絡は学校に任せてください。遊具も借りてきましょう。



ゆっくり語り合ってください。子どもたちはしっかり預かります。

☆活動メニュー

- ・体育館でサーキット遊び
 - ・プールで水遊び
 - ・簡単お菓子作り 等々
- 「集団での活動」にこだわらず、誰もが無理なく参加できる内容を用意しました。



今日は何して遊ぼうか？

テーマを決めて学習も…「三人よれば文殊の知恵」だ！

- ・「知は力」。正しい知識，正しい情報を学びます。
- ・我が子の姿をよく知ることが，適切な対応につながることを信じて学びました。
- ・「我が子の小さな変化に気づける親でありたい」と思いました。
- ・交替で学習のリーダーにもなります。

子どもたちの様子は，保護者に口頭で伝えます。



事例から学ぶ

保護者の方々の困り感を的確にとらえ，保護者支援をすすめることが大切です。一人で悩みを抱え込んでいる保護者の方も少なくありません。本事例のように，保護者の方々がお互いに支え合う場をもつことは，大変有効な支援となります。お互いの経験を語り合ったり，子どもへの適切なかわり方のヒントを得たり，新しい情報を得たりすることができるとともに，心の支えとなります。本事例の学校のように，保護者の方々の主体的な動きを支援していく姿勢がよいと思います。

保護者の方からは，「保護者同士の支え合いで，孤独感から解放されました」「学校を超えた子ども同士のつながりができてうれしいです」などのご意見が聞かれました。

事例 17

外部機関との連携を生かした支援(小学校)

～保護者への支援が子どもを変える～

2年生の夏休み明けから教室へ入れなくなり、お母さんと保健室で過ごすようになったヨウジさん。SRECが中心となり、校内委員会でヨウジさんへの支援の検討が始まりました。検討を重ねるうちに、お母さんを支援することがヨウジさんにとっての重要な支援ではないかということが分かってきました。しかし、校内委員会だけでは支援の糸口が見つかりませんでした。そこで、外部機関に協力を求めることにしました。相談しやすい機関へ協力を求めたことをきっかけに、連携を求めたい様々な機関へとつながり、まさしく「みんなで支援」ができてきました。

連携の流れ

保健室で過ごすようになったヨウジさんとお母さん

相談

担任 養護教諭 保育士

相談

相談

校内委員会



SREC

SRECから外部専門機関に支援要請

ヨウジさんへ

- ・特性に合った学習の進め方の検討等
- ・居場所作り保健室等

お母さん

- ・気持ちの理解
- ・心情に寄り添った声かけや助言についての検討等

間接的支援

心理療法士による心理検査、遊戯療法

精神保健福祉士、医師等のカウンセリング

直接的支援

外部専門機関

中間教室担当

精神保健福祉士

医療機関附属生活支援センター

医療機関

※週1回中間教室を訪問している。

お母さんにおんぶや抱っこをせがみ、一時も離れようとしないうヨウジさん。お母さんも不安でした。



カウンセリング等を通して、お母さんは安心感をもち、それによってヨウジさんも少しずつお母さんから離れるようになりました。

●まずはヨウジさんが安心してすごせる居場所の確保

校内委員会で、ヨウジさんがお母さんと落ち着いて過ごせる場所として保健室、自律学級、図書館などを考え、時間割を組みました。下校前に次の日の時間割をヨウジさんに提示し、明日も安心して登校できるようにしました。また、何をして過ごすかも、本人が決めるようにしました。

●お母さん、ヨウジさんと相談を重ねるうちに分かってきたこと

ヨウジさんへの支援の糸口をさぐるために、担任、養護教諭、SRECがお母さんやヨウジさん、ヨウジさんの保育園時代の担当保育士と相談をしました。相談の中で、お母さんや家族が抱えている問題が次第に明らかになってきました。お母さんの不安が強く、お母さん自身への支援がまず必要ではないかと考えられましたが、学校だけで解決するには難しい問題で、外部機関へ支援を依頼することになりました。

●外部機関との連携

SRECが市内にある中間教室へ出向き、親子の状況について説明して、支援をお願いしました。中間教室へは週に一度、病院附属生活支援センターの精神保健福祉士が訪問しており、中間教室担当から紹介していただくことになりました。

訪問日にお母さんとヨウジさんが中間教室へ出向き、面接を受けました。その結果、二人で生活支援センターへ週1回通い、そこでカウンセリングを受けることになりました。

関係づくりも進み、2ヶ月後には精神保健福祉士から受診を勧めてもらい、医師によるお母さんのカウンセリング、心理療法士によるヨウジさんの心理検査や遊戯療法が行われるようになりました。診察の結果、ヨウジさんはADHDもあることがわかりました。そして、校内委員会を開催した際には、この精神保健福祉士の方にも参加してもらい、生活支援センターや病院での二人の状況から学校での支援の方法について適切にアドバイスを受けることができました。

●お母さんの変容がヨウジさんの変容に

生活支援センターでの週1回のカウンセリングで、家庭の悩みや自分自身のことを語り始めたお母さん。「今まで一人で悩んできたけれど、話すところできてとても楽になりました」と気持ちが安定してきたようでした。そうすると、ヨウジさんも少しずつお母さんから離れて活動する時間が増えてきました。給食はクラスの友だち数人と自律学級で食べたり、休み時間は自律学級の児童とプレイルームで遊んだりすることができるようになりました。

その後も医師によるカウンセリングを続けているお母さんは、「時間はかかるけれど、私の生き方や子どもへの接し方を少しずつ変えていこうと思います」と自信がなかった自分を少しずつ肯定的に受け止めたり、前向きな気持ちがもてたりするようになってきました。

ヨウジさんは、自律学級を自分の居場所と決め、友だちとの学習にも積極的に取り組めるようになってきました。

事例から学ぶ

不登校傾向のあるお子さんの場合、支援の方法を探っていく中で、本人だけでなく保護者への支援が必要と判断されるケースが多いと思います。保護者の不安感がお子さんの不安感につながっている場合です。保護者支援は、外部機関と連携して対応していくことが有効です。地域により利用できる外部機関は違うと思いますが、まずは学校が相談しやすい機関へ協力を求めていくと、そこからいろいろな機関へ広がっていきます。また、受診を勧める必要がある場合、学校側から働きかけるよりも、専門機関から保護者へ働きかけてもらう方がスムーズにいく場合が多いと思われます。

～生徒の自信を生み出す支援～

「自律学級の教室や家庭では元気一杯なのに、原学級や学年などには入っていけない。どうしてなんだろう？」サキさんはそんな生徒です。本事例は、学校生活における様々な場面で元気一杯生活できるサキさんの姿を願って自律学級で取り組んだ実践です。サキさんは責任ある役割を果たすことによってセルフエスティーム（自尊感情）が高まり、以前より自信をもって学校生活を送ることができるようになりました。

●保護者との懇談

小学校の頃から、時々登校を渋ることがありました。原学級の友だちといろいろあったようです。中学校に入学してからは、登校を渋ることはなくなりましたが、自律学級の教室を出ることをとても嫌がります。全校集会や学年のキャンプは、物陰から見ているようなときが多いようです。もっと伸び伸びしてほしいです。



母親



担任教師

4月からサキさんと過ごしていて、いいなあと思ったことがたくさんあります。例えば、自律学級の生徒みんなと仲良くできて、誰にでも話しかけることができます。学級の中ではリーダーです。学級のみんなと一緒に給食当番などのときに普通に教室を出られます。活動の場面を工夫すればきっとサキさんらしく自信をもって活動できるようになると思います。

●学級の係の選出

Plan

お母さんの話から、「他の生活はうまくいっているのに、なぜ全校集会とか行きたがらないのかしら…」と、担任として焦りのようなものを感じました。

教師も保護者も、つい「できないこと」ばかりに目がいきがちですが、できることや得意なことを見つけ、支援の計画に生かしていくことが大切です。

サキさんの場合、自律学級の中でリーダーシップがとれることを生かして、責任のある役割を割り振り、その役割を果たせる場面を設けることが必要ではないかと考えました。

Do

学級の係決めに先立って、学級内でそれぞれの生徒のいいところ・得意なことについて話し合いました。サキさんについては、級友に対していつも優しく声をかけていることや、給食の準備などを先頭に立ってやっていることが出されました。サキさんが学級内でリーダー的存在であることが認められ、サキさんはルーム長に選出されました。



See

3年生のサキさんは、ルーム長に選出された後、以前にも増して1年生に積極的に声をかけるようになりました。教室が騒がしいときなど、注意することが多くなりました。また、教師が困っている場面では、友だちを誘って手伝いをしてくれることもありました。

ルーム長という役割を得たことで、サキさんは学級の中で一層積極的に活動するようになったと考えました。



●セルフエスティームを高めるために

Plan

ルーム長としての自覚が高まり、役割を積極的に果たそうとしているサキさんに、ルーム長としての役割をクローズアップした活動を設定したいと考えました。

その活動を通して、学級の友だちや周囲の人から認められる体験を積み、充実感や達成感を味わう中で、サキさんのセルフエスティームが高まり、一層成長する姿を願いました。

ルーム長の出番を強調しよう。他の生徒にも出番があって、楽しめる活動がいいな。周囲の人にもさりげなく褒めてもらう場面をつくりたいな。



Do

「みんなの家に行ってみよう！」



- ① 1日1軒、みんなの家に全員で行きます。1時間で往復しましょう。
- ② きちんと並んで歩くこと。交通に注意しましょう。
先頭はルーム長。2番目はその日の「道案内係」。最後尾は担任。
- ③ 道で会った人には、あいさつをしましょう。
- ④ ルーム長や先生の注意をよく聞きましょう。

生徒たちは、お互いの家のことはよく知らないようで、学区内の地図を見ながら、出かける順番を決めていました。

リハーサル初日、張り切って玄関前に並ぶ生徒たち。ルーム長のサキさんの指示で整列すると、たまたま通りかかった事務室の先生が「〇〇学級の生徒が整列するのが初めて見たよ。並ぶの上手だねー」と声をかけてくださいました。

アツシさんはルーム長のサキさんを追い抜いて走り出してしまうことがたまにありますが、サキさんの「走っちゃだめ」の一言で立ち止まります。普段は、みんなの後ろを遅れないようについて歩くことの多いノブオさんも、自分が案内係の日は、みんなの先頭を切って歩き、とても張り切っています。

家に着くと、得意そうにペットの子猫を連れてきて、みんなに触らせてくれたジュンコさん。いつも遊ぶ公園にも案内して伸び伸びと駆け回ったリョウさん。学校とは少し違う家庭や地域でのお互いの姿を見ることができました。

6名の家への訪問が終わり、最終日はナオコさんの家です。桜が満開の、いい天気の日でした。出発前に、みんなでクッキーとポップコーンのおやつを作りました。ナオコさんの家の近くの公園に寄り、たっぷり遊び、おやつを食べて過ごしました。



See

この活動の後、全校集会のときには、サキさんの声かけでみんなが整列して入場することが習慣になりました。

集会活動に参加することが苦手なサキさんでしたが、ルーム長の役割を果たすことが自信になって、集会活動に参加できるようになったと考えます。



事例から学ぶ

「生きる力」とは、「自分に自信をもち、自分もなかなか捨てたもんじゃないなあ」と思える経験を重ねることで育まれるものです。子どもたちの学校生活においては、常に意識されなければいけないことだと思います。

また、子どもへの支援は、指導計画を基に行うことが大切です。計画（Plan）を実行（Do）し、評価（See）して、さらに計画を修正し…といったP-D-Sサイクルを意識して行うことによって、子どもへの支援は、より状況に対応した適切なものとなります。

事例 19

子ども・保護者・職員それぞれの願いを重ねて(中学校)

～支援をチームで検討・修正～

高機能自閉症と診断されたコウタさんは、小学校では自律学級に在籍しつつ、原学級での生活も大切にして学校生活を送ってきました。トラブルもありましたが、周囲の理解を得て、楽しい小学校生活だったそうです。でも、比較的小規模でアットホームな雰囲気小学校とは違い、中学校では大丈夫だろうかと保護者の心配は尽きません。

原学級や自律学級でコウタさんがどのような支援を受けたのか紹介します。

●中学校生活をスムーズにスタートするために >>> 保護者と入学前に懇談しました



人間関係を築くのが苦手なコウタのことですから、きっと皆さんに迷惑をかけることが多いと思うんです。でも、苦手だからこそ、原学級で人間関係の勉強をして欲しいと願っています。

小学校のときは小さい学校だったので、みんなコウタの特徴を自然にわかってくれて、何かあっても「コウタ君だ」と許してくれていた部分があると思います。でも、中学校では、他の小学校から入学する人もいますし、コウタのことをよく知らないお友達とトラブルになったら…と心配です。

特に、カッとくる衝動を抑えられないことがあるようで、お友だちにけがでもさせてしまったら…。そんなにしょっちゅうあるわけではないんですけど、保護者の方々にも、こういう子どもだということをお話した方がいいのではないかと思います。

入学式の日、原学級の保護者の方にお話したいので、お時間をもらえないでしょうか。

数日後

保護者の皆さんにどうやってお話ししたらいいか、父親とも相談しながら一生懸命考えたんですけど、まとまりません。どんな言葉で説明しても、コウタの姿と別のものになるような気がして…申し訳ありませんが、入学式の日、皆さんにお話しするのはやめにします。皆さんには、**実際のコウタの姿を見て、感じてほしい**です。

●保護者との懇談を受けとめ、コウタさんへの支援をチームで話し合って決めました



コウタさんの支援チーム

「**実際のコウタの姿を見て、感じてほしい**」という保護者の言葉を大切にしたい。始めからコウタさんの苦手なことを取り除いてしまうのではなく、つまずきや悩みを、周囲に迷惑がかかることがあっても体験することで、コウタさんも周囲もみんなが成長できるように支援したい。

原学級での支援(抜粋)

支援1

常に担任の様子を見て、声をかけられるように、コウタさんの座席は、教卓前で固定する。

支援2

原学級の授業で困難な教科は、自律学級の授業や放課後などに、個別に指導する。

支援3

特別扱いしない。不適切な行為は指摘する。文章に書いて振り返り、気持ちを言葉で表すようにする。

支援4

保護者に学校生活の様子を知らせる。学校での対応が困難な場合は、保護者にも協力を願う。

●コウタさんの中学校生活

入学してしばらくした頃、コウタさんが原学級の友だちに対して、暴力（蹴る・物を投げる）をふるってしまうという出来事が起きました。相手の生徒からも詳しく話を聞いて、コウタさんが謝ることができる機会を設けることにし、わだかまりが残らないように配慮しました。

原学級の担任は、問題行動が起きたとき、生徒に文章を書いて振り返ることを課していたので、コウタさんも同じように対応しました。しかし、コウタさんにとって文章を書くことはとても苦手なことでした。困惑し、座っているだけで、ただ時間ばかりが過ぎてしまいました。

なんで蹴ってしまったのかなあ。自分でも理由がよくわからないんだ…
A君になんて言って謝ったらいいのかなあ。



自律学級担任から連絡帳

コウタさんと今回の出来事について話をしました。やはり蹴ってしまった原因は本人もよく分かっていませんでした。詳しく話すうちに、その前に誰かにきつい言葉で注意された、ということが分かりました。何か言われイライラした状態のとき、Aさんに更に注意されて、よく考える前に足が出てしまったのです。出来事の順番をメモしながら、「コウタさんには、イライラしているという手や足が出てしまうことがあるから、直していかなければいけないね。」と話しました。その決意やAさんに謝りたい気持ちを、文章にしたらどうかと提案しました。

文章を書くことは、コウタさんにとってかなり難しい課題ですが、出来事の順番や問題点を整理して考えるためには、良い手段ではないかと思います。自分のやった行為を謝めることは、誰にとっても難しいことです。コウタさんには、友だちに謝る前にまずは文章に書いて、言葉にして表すということを経験してほしいと思っています。

連絡帳 家庭から

本人はA君を蹴ってしまったことは悪かったと分かっているようですが、蹴るに至った原因がよく分かっていないようで、家でも文章で表現するのにかなりの時間を費やしました。もともと感情についての理解が難しいコウタにとってそれを文章にするのはとても難しいことです。これを書いて、彼にとっての反省になっているのかどうか???

●支援の方向を修正する

これらの出来事から、コウタさんにとって、出来事を順序立てて説明することや、感情を文章で表現することがとても難しいことであることが一層はっきりと分かってきました。そこで、支援チームで話し合って「支援3」を次のように修正しました。

支援3

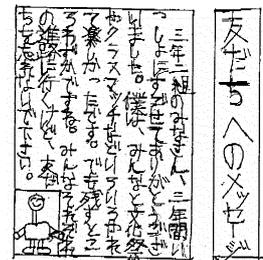
特別扱いしない。不適切な行為は指摘する。文章に書いて振り返り、気持ちを言葉で表すようにする。



支援3 <修正>

特別扱いしない。不適切な行為は指摘する。不適切な行動が起きてしまったときは、できごとの順番や原因を、コウタさんに分かるように、メモをとりながら話し合う。それを基にして、文章を書いたり、謝ったりして、果たすべき責任について一緒に考える。

このような支援を根気よく繰り返す中で、コウタさん自身にも、問題となる行動が起りやすいのは、なんとなくイライラしたときだったことが分かってきました。以後、怒りの感情をぐっと我慢して、不適切な行為をしないよう努力するようになりました。1年生のとき、数回起きた暴力行為は3年生になってからは1度もなく、落ち着いた生活の中で卒業を迎えることができました。



事例から学ぶ

この事例の場合、保護者の方の願いから、原学級で特別扱いせず、トラブルや問題にその都度対処するようにしました。しかし、原学級の生徒に通常行われている指導が、その子にはうまくいかないこともあります。そこで支援チームでは、支援の方向を修正し、その子が自分の行為を見返せるような支援を取り入れるよう修正しました。

子ども・保護者・教職員それぞれの願いを重ね合わせて計画し、実施、見直し、修正といった一連の流れを大事にして支援をすすめることで、よりその子に合った支援となります。

安定した集団生活を送るための手だて ～自分は「今」・「何を」・「どのようにしたらいいか」が分かる!～



発達障害のある子どもたちに対しては、その子のもつ強い情報処理能力を生かし安心して確実に学べるための支援、主体的に柔軟に生きるための支援が必要となります。これらの支援によって、本人が安心でき、学びやすく、学習に主体的に取り組む姿勢が向上する事は、問題行動の予防にもなります。

最初から「やらない」、「やらせない」、「できっこない」と決めつけるのではなく、支援を工夫し「やれる」経験を積み重ねていくことで、子どもたちは様々な活動に意欲的に取り組めるようになっていきます。

※この項における「発達障害」＝発達障害者支援法（H17.4.1施行）第2条の定義によります。

1 構造化

構造化とは、支援及び学習を組織化、体系化することです。

構造化は、状況の理解が悪い子、注意を向けられない子、自分で思考や行動を組織立てることが苦手な子が、できるだけ自律的自発的に考えたり行動したりできるようにすることを目的として行われます。「今」・「何を」・「どのようにしたらいいか」が分かるようにします。場所や場面、スケジュールや時間、活動の内容や順序などを構造化することで、適切な行動が可能になり、成功体験へとつながります。

スケジュールや時間の構造化

- *一日の生活の見通しをもち、自分から活動できるようにします。
- *始まりと終わりをはっきり示します。
- *変更がある場合は、できるだけ事前に予告します。



日課表の固定化(例)

(ルーティン＝決まった手順や習慣)

1. 朝の会
2. 算数
- 休み時間
3. 図工・音楽
その他の教科
4. 国語(音読)
給食
掃除
- 5・6. 野外活動
物作り等

- ・体を動かして、さわやかに1日をスタートする。
- ・散歩や緩やかなルールの集団ゲームによるSST（ソーシャルスキルトレーニング）を行う。

- ・スモールステップで学習プリントを進めたり、その子にあったレベルからスタートしたりする。
- ・やった過程が結果として見え、めあてが明確にもてるようにする。また、やったものについてはその場で即時に評価し、結果を表示する（意欲付け）。

- ・声に出して、できるだけ早く読む。
- ・スモールステップで積み重ねていく。

※日課が固定しやすい自律学級等で参考にして下さい。

場所や場面の構造化

- *活動、場所、場面を対応させて、今やるべき活動は何か明確にします。
- *立ち入り禁止の場所等は視覚的に分かるよう、テープ等で明示します。
- *掲示物はシンプルにします。気の散らない工夫とともにやったことが確認できるようにします。
- *騒音や雑音ができるだけ入らないよう配慮します。
- *座席は、人間関係を十分考慮して配置します。

- * 学習教材についてはすべて棚に管理します。どこに何があるかということや、借りるための手続きを明示します。
- * 道具は、使ったらすぐ片付けます。整理整頓に心掛けます。

活動内容や順序の構造化

- * 活動の順序をスクリプト（台本）にして掲示し、何をどのようにすればよいのか見通しをもって行い、目標が達成できるようにします。
- * 活動内容（どれだけの課題をやるのか・何をやるのか・いつ終わるのか・終わったら次に何をするのか）を明確にします。
- * 視覚教材や、コンピュータを積極的に利用します。
 - ※「自閉症ガイドライン2005」（長野県）が参考になります。

2 学習内容の見直し

- * 個に応じた基礎学力の定着化をはかるために…
 - ・ 読み書き計算力をつけるための教材を選定します。
 - ・ 興味をもてるようにクイズ形式のプリント等で意欲を喚起します。
- * 分かる授業・楽しい授業に…
 - ・ 教材の視覚化に努め、操作活動を多く取り入れます。
 - ・ 物作り（動くおもちゃ作り・簡単な調理・プラバンやアイロンビーズ等）活動で、作る楽しさを感じられるようにします。
 - ・ 実験（ペットボトルロケット、電池や磁石を使って）で学習への意欲を高めます。
 - ・ 野外活動（木を集めて薪作り、みんなで調理）等で楽しく協力し合う経験が積めるようにします。



3 SST（ソーシャルスキルトレーニング）

- * 社会生活（集団生活）を営んでいく上で必要な技術のことをソーシャルスキル（社会的スキル）とよびます。ソーシャルスキルは練習や経験によって習得されますが、発達障害のある子どもたちは社会的場面の情報処理が苦手なため、この技術がなかなか身に付きません。仲間たちから拒否されたり、孤立したりし、円滑な社会生活を送るのが難しくなり、様々な二次の問題が生じやすくなります。遊びの場面・物作りやアウトドア学習等の中で、協力し合うことやトラブルにあった際の解決の仕方を学びます。

例：順番を守る

じゃんけんで決める、生まれた月の順にする等を話し合う。

乱暴な言動

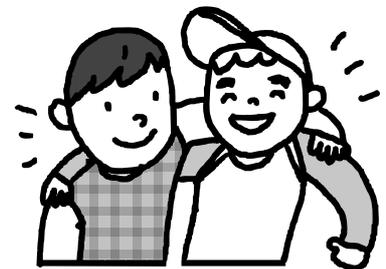
どのように言えば相手が嫌な感じがしないかを考え、声に出して練習する。

人に何かを頼む時

言い方の練習をしてからロールプレイを試みる。

腹が立った時

深呼吸をする。力をぐっと入れ、抜く練習をする。その場を自分から離れ、落ちつくまで待つ。



問題行動が起きる前に環境の調整をすることで、予想される問題行動を防ぐことができます。また楽しく意欲のわく活動を仕組むことで、子どもたちの中に自己肯定感を育てるとともに、人と協力し合うことの楽しさを感じることができます。